Yokoso Obara Iinkai

おばらのじかん

Take Free［0円］

第13号

2018 Spring

巻頭特集

イラッシャイ 小原へようこそ！
はだしのひと

足の達人家族に迫る！

［若手和紙作家 漆芸家］

［カフェ 亀ゴージュ 店主］

［マンガ イカくんキンちゃんの小原日記］

［小原いろいろ情報］

小原人集まれ！「おばちゅう卒」（おばちゅう以外でもOK）

www.facebook.com/obachuu

巻頭特集

イラッシャイ小原へようこそ！

はだしのひと

今回、小原地区の大坂町に移住して2年目、金子さん家族に移住の経緯や暮らしぶりについてお聞きしました。金子さん家族は、夫の潤さん、奥様の美保さん、3歳になる息子の岳くんとの3人暮らし。

行田市立東小学校での調査の様子

行田市の取組が英字新聞に掲載

潤さんは現在、中京大学の助教。進化の観点も含めた「はだし」と健康の関係について研究している。TVドラマで話題になった『陸王』の舞台となった埼玉県行田市、行田市内の足袋業者と中京大学とで組み、行田市立東小学校で足袋を履いて学校生活を送る研究をしているそうだ。

一方美保さんは、ベアフットインクジャパン株式会社（アウトドアシューズのソールなどで有名なビブラム社の五本指シューズ輸入元）の社員。先進的な会社で息子岳くんの子育てと在宅で仕事を両立している。

元々は潤さんが千葉県、美保さんが埼玉県の出身で、結婚後は、東京、千葉に住んでいたが3・11の震災後、息子さんが生まれ、子育てのために西の方への移住を考えていたところ、愛知県の中京大学の公募に通ったのがきっかけで、愛知県に来ることになった。

元々田舎志向だったんですか？

美保さんの祖母は埼玉県でも標高600mもある武甲山の近くに住んでおり、95才まで薪で風呂を焚き、自家製の野菜を育てるなどほぼ自給自足に近い生活をしていたそうだ。不便な生活だからこそ、体をフルにつかって、健康に生きる祖母の姿を見て育ったので田舎には抵抗はなかった。

潤さんも元々、自給自足や田舎への憧れはあったが、実際にそれに近い美保さんの祖母に出会ったことで、より現実的に考えられるようになり、小原への移住につながったそうです。

中京大学での仕事のため、引っ越すにあたり、大学から近くの田舎の情報をさがすと藤岡・小原・旭が候補にあがった。

実際に現地に足を運んでみると、藤岡、旭よりも小原の空気と里山の風景が一番気に入ったと話す。

しかし、当時は小原地区の空き家バンクの物件は数が非常に少なく、かなり苦労して探したという。旭地区は比較的物件が豊富で、小原地区で無ければ、旭地区に住もうと思っていたそう。物件が無い中、金子さんたちの物件の探し方はとてもユニークだった。

自作のロケットストーブ

田舎はまず人脈が大事と、藤岡地区では藤岡出身の知人に紹介してもらい随分まわった。

旭地区は豊田市に出張の際にフリーペーパーの耕ライフで、旭地区の農家民宿ちんちゃん亭を知り、そこに家族で泊まり旭地区を知った。

小原地区はつても何もなかったので、人が集まる場所を探そうと喫茶店などのお店を探した。藤岡方面から小原に向かい、潤さんがコレだと思った喫茶店は喫茶おばら。そこが当りだった。潤さんは鼻が利くそうだ。喫茶おばらへ飛び込み、事情を話すと偶然にもママさんの旦那さんが豊田市役所の小原支所に務めている幸運。

何日か後、喫茶店に大坂町の物件がでるとの情報が入り、現在の物件に入居できることになった。

実際住んでみてどうですか？

美保さん「寒いですね～（笑）寒い以外はとっても」あと「東京とか街の子は地声が小さいなと感じていた。子どもを育てるにあたって、田舎だと静かにしなさいという場面があまりない。そんな環境で息子を伸び伸びしていられることがありがたい。」と話す。

潤さんは「1年目は大変でしたね。」家は直したい部分がたくさんあって、空き家バンクの補助制度が使えなかったので、お金をかけずに、ほぼ自分たちで修理したそうだ。

「田舎の不便なところは？」とよく知人にも聞かれるが、千葉県に住んでいたときから、大手のスーパーにはいかず、顔の見える安心できる農家さんから野菜を買ったり、地元のお魚屋さんやお肉屋さんに行っていたので、今もあまり大差はなく、不便は感じていないそうで、顔のみえる関係で地域でお金を循環できるように心がけているそうだ。

また、千葉県でもそうだったが、小原でも家庭菜園を始め、大家さんから頂くものも合わせると、家で食べる分の野菜はほぼ賄えている。

そんないろいろな下地があったおかげで、田舎でも不便を感じない生活に自然となっていたのだと話す。

そうなると森の臭いのする空気はおいしいし、星や自然に癒やされるし、良いことだらけ。

「都会が恋しいとかまったくないですね。仕事をするところではあるけど。」と話すお二人。

実際、田舎に来て二人が変わったことは、有機肥料じゃないと、オーガニックでないと駄目とか、都会でくらしていた時は健康的なものを探して買ったり、嗜好していたそうです。最近は、ご近所の方にいただく採れたての野菜が美味しく、家の周りには自然の恵が溢れています。旬の食べ物に囲まれて生活することで、おおらかな考え方になったそうだ。来年からは自分たちでもっと本格的に野菜を育てる予定だ。

都会にいた時は、都会生活とのギャップを埋めるために、週末山などに行き自然と触合うことで折り合いをつける生活だったが、今は気分転換の必要がなく旅行にもあまり行かなくなった。夜に帰って来て満天の星空を見て、森の匂いがする空気を深呼吸するだけで良い気分転換になると話す。

美保さんが今の会社で働くようになった経緯もとても面白かった。

まだ、東京に住んでいた頃、潤さんがアメリカに出張の際に、ビブラム社のファイブフィンガーズという五本指のシューズを興味本位で買ってきたのがすべてのはじまりだった。

元々、潤さんは靴の中敷きでの怪我を予防する研究を大学院でしていた。それは、中敷で足アーチ（土踏まず）の動きを矯正して怪我を予防するという考え。一般的には、疲労とともにアーチが落ちて怪我をしやすくなるそうだが、ファイブフィンガーズに出会い、はだしで走ってみると、走って疲れているにもかかわらずアーチが上がっていてすごく驚いたという。

その日自宅に帰ってきた潤さんは、美保さんに爛々とした目で話をした。しかしそれは同時に、足を矯正する中敷きを否定することになり悩んだそうだ。

ファイブフィンガーズのコンセプトは自然体。過度な技術や、過剰な保護は体が怠けて弱ってしまうので、最低限の道具で人間本来のポテンシャルを引き出すのがコンセプト。まさに潤さんの研究テーマにも通じていた。

当時、美保さんは好んでハイヒールを履いていたので、5本指のファイブフィンガーズには抵抗があり、初めは嫌々履いていたそうだが、元々チアリーダーをやっていて、運動が好きだったこともあり、履いてみると一気に良さがわかりハマってしまった。

当時は、好きだったオーガニックのお店やクラフトビール（地ビール）のお店にその靴で出かけると、ほしいという人がいて代わりに買ってあげていた。そういうことがすごく増えてきて、それなら代理店になろうと言う話になり、潤さんは仕事をしていたので、美保さんだけが代理店を始めてみたところ、なんと店舗をもっていないのに、全国売上トップクラスに！特に女性を中心に販売したことが評価され、委託契約からパート、その後、正社員となり、今では管理・運営を任されるようになった。

つづく

ファイブフィンガーズなど面白い靴がいっぱい。

自宅前にて

今の会社は社風が自由で、信念をもっていれば、個人個人仕事のスタイルも様々だった。インターネット回線があれば仕事はできるので、田舎に住むことも大賛成してくれた。息子の岳くんを出産したことで、会社での働き方もどんどん変えてくれ、在宅で子育てとの両立ができる今のスタイルに落ち着いたそうだ。

愛知ではファイブフィンガーズを見て買える店舗が少ないので、小原の大坂町の自宅を開放して2度程、催事をしたこともあるそうだ。

裸足ランニングクラブ

ファイブフィンガーズとの出会いを期に、裸足ランニングクラブにも二人は所属。今では、全国クラブがあるのですが、当初愛知県にはなかったので、愛知に引っ越して来たのを期に愛知にもクラブを作った。名城公園に定期的に集まり、猿投山などいろいろな所を裸足で走っているそうだ。「裸足ランニングは、ランニングが苦手な人ほど実はとっても楽に走れる走法だ」と話す。人間本来の足の使い方になり、慣れると怪我もしにくくなり膝にもやさしいという。

ワラーチの大ヒット

また、ビブラムソールを使った、手作りの走れるサンダル「ワラーチ」のワークショップはびっくりだったと話す。

旭のちんちゃん亭と知り合ったことがきっかけで愛知のママさんたちに大ブレーク。すでに5百人くらいの人にワラーチを作ってもらった。今、思っても「まだ岳くんが小さいのによくやったなと思う。」今年も4月から7月の週末はほどんどワラーチのワークショップだという。（ワラーチはメキシコ北西部の先住民族ララムリが履いていたサンダルを模した物）

すべてのきっかけは、興味本位で買ってきたファイブフィンガーズ。この靴に出会ってなかったら、裸足が研究のテーマにもならなかったし、裸足ランニングにも今の会社にも入っていなかった。そして、小原にも来ていなかったと思う、と語る。

大きな存在 大家の千賀さん

小原に住んで一番良かったことは、やっぱり大家の千賀さん。家が素敵でも、環境がよくても、大家さんとの相性がとっても大切。

自分たちも田舎の暮らし方を、地元の方と関わりながら学びたかったので、元気で明るくて、面倒見の良い千賀さんが近くにいてくれて本当によかったそうだ。

息子の岳くんは、千賀さんが大好きだ。1才で小原に来たときから大好きで、今では『千賀のばぁちゃん千賀のばぁちゃん』と言ってとても懐いている。

集会所で体操教室を開催

潤さんは、昨年の8月から近所の集会場で奥さん・お婆ちゃんを相手に体操教室を行っている。初めは大坂町限定だったが、口コミで他の地区からも参加者が集まり、今では9人ほどに。回数も月1回でしたが要望により月2回になり今までに13回開催している。体操教室の内容は、基本は背骨をほぐす運動で、空気を抜いたバランスボールを使ったり、参加者同士で身体を踏んだり。

皆さん、帰る頃にはピンと姿勢がよくなって帰るそうで、寝付きもよく体調も良いそうだ。

潤さんのやっている体操は強度こそ違うものの、アスリートやスポーツ選手がやっているようなことをベースとしているので効果は高いようだ。

今は人数が増えすぎて集会所に入れないのと、一人一人に目が行き届かないとのことで入会はお断りしている。

こんな関わり合いもあり、金子夫婦は近所の奥さんやお婆ちゃんたちと、とても仲が良い。

それは金子夫婦に健康に関する知識やスキルがあったので、うまく溶け込めた気がすると話す。

今度、いっしょに安曇野へ旅行に行く予定もあるそうだ。

美保さん「田舎はのんびりしていると思っていたけど、やることが多くて忙しい。そのあたりはみんなが憧れている田舎の生活ではないかも知れないけど、豊かな自然であったり、良い人であったり。そんな贅沢な環境で過ごせるのがありがたい。」

潤さん「裸足に固執するわけではないが人間の体をベースに考えると裸足で歩くことの方が長い歴史があるし、田舎での、木を切ったり、田畑を耕したりの体を使った生活の方が人間本来の構造にあっている。最近は道具がよくなった分道具に頼るのが当たり前になってしまい、人間本来の機能が弱くなっているので、本来人間が持っている、本能的な部分を突き詰めて研究発信していきたい。」と話す。

今期、潤さんは小原の地域会議委員になることになった。外から来たからこそ、わかる小原の魅力を発見し、小原に新しい風を期待したい。

T.S

漆芸家 安藤 源一郎

1975 西加茂郡小原村生まれ
2001 愛知県立芸術大学大学院修了
2004 香川県漆芸研究所修了
主な受賞歴
2009 磯井正美賞展「磯井正美賞（最高賞）」
2016 日本伝統工芸展「日本工芸会新人賞」など
2018 10月に松坂屋名古屋店美術画廊にて3回目の個展を開催予定

漆芸という言葉をご存知ですか。昔はハレの日に使われたりした漆器。今ではほとんどがプラスチックですが、漆の歴史は九千年ほど前の縄文時代までさかのぼるとか。正倉院の宝物には漆を使用したものが多数みられるそうです。漆を使った工芸を漆芸といいますが、今回は小原の漆芸作家、笹平工房の安藤源一郎さんをたずねました。

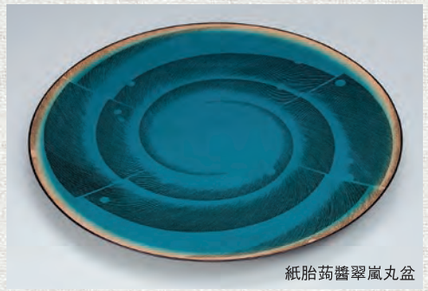
源一郎さんのお父様は、先ごろ松平東照宮の格天井画を描かれた安藤則義さん。漆芸作家のお父さまのもと、日々漆と向き合う若手作家さんです。漆芸の技法やご自身が手掛けるワークショップ等について、とても丁寧に教えていただきました。

県立芸大大学院を修了されたあと香川県の漆芸研究所で勉強されたそうですね。

元は油絵専攻で、香川の漆芸研究所では「キンマ」という技法を習得しました。小原和紙を漆で型に張り重ねて作った器に「キンマ」の技法で加飾して制作しています。キンマは「蒟醤」という字をあてますが元はタイ、ミャンマーの技法です。何層にも塗り重ねた漆に彫刻刀で模様を彫り、そこに色漆を何度も埋めて最後に炭で研ぎ出して仕上げます。簡単に説明するとこんな感じですが、作業工程が多く非常に細かい作業です。

実際に日本伝統工芸展に出品された大きな丸盆を見せていただきました。

「紙胎蒟醤翠嵐丸盆」と命名された丸盆は、非常に細かく繊細な線で渦のような文様が描かれ、本当にすいこまれるようです。気の遠くなるような作業ですね…彫るのに2週間、埋める作業も8、9回はおこないます。地道な作業の繰り返しですが、こういった伝統工芸というのは、道具も技術も先人の知恵がいっぱいつまっています。仕上げに使う炭はさるすべりの炭がいいとか。いにしえから伝わる技法を先人に感謝しながら日々制作しています。



紙胎蒟醤翠嵐丸盆

工芸、伝統文化の発信や普及を目的とした子供さん向けのワークショップを開催しているとお聞きしました。

文化庁の「文化芸術による子供の育成事業」に基づき、小中学生向けに漆芸の蒔絵（まきえ）の技法で好きな絵を描くワークショップを行っています。後々使えるようにスプーンだったりお椀だったり、菓子器にお気に入りのモチーフを描き、それを使って「こども茶会」をしたこともあります。

ワークショップの様子

とても楽しそうですね。

金属の粉をまいたり、漆を塗ったり、細かい作業もありますが、思い思いのモチーフを蒔絵の技法で完成させ、達成感とともに漆芸の楽しさや美しさを実感してもらえてると思います。実際に使ってみると愛着もわくようです。伝統文化にふれて、少しでも興味を持ってもらえるとうれしいですね。

昔は足助や小原でも上質な漆がとれ、「三河漆」といって日光東照宮にも使われたそうです。国産漆は大変貴重ですが、小原でも「鳥屋平（とやがひら）」という藤井達吉先生の工房跡地に漆の木を植樹しました。いつか小原の漆が日本の文化財の修復に使われるかもしれません。

ワークショップで作ったスプーン

これからはどんな活動を

伝統工芸の発展に努め、「自然」を主題に、漆芸の創作活動とともに、ワークショップ等を通じて漆芸の美しさ、楽しさに触れてもらいたいと思っています。小原和紙工芸会会員としても「鳥屋平」の保全や、2020年に豊田市で開催されるIAPMA（紙を素材とし表現するアーティストの世界大会）に向けて活動していきたいです。

静かに、穏やかに語られる中に、漆芸や伝統工芸に対する熱い思いをたくさん感じました。小原でも是非ワークショップを開催してほしいですね。

K.A

カフェ亀ゴージュ

店主 山内 亜貴子 さん

藤岡の深見団地の中に、ひっそりと落ち着いたトーンの外観。店内は小物が無造作でオシャレaな小さなカフェだ。『亀ゴージュ』ちょっと変わった名前は、亀はゆっくりしていってもらう意味、ゴージュは昔飼っていた愛犬の名だそうだ。ちなみに犬の名は（宮沢賢治 セロ弾きのゴーシュから取ったそう。）

このお店のオーナーの明るくて笑顔が素敵な山内亜貴子さんは、4年前に小原地区の北篠平町に引っ越してきた。小原は立地が本当にちょうど良いと話す。名古屋から1時間で遠出感はあるけど、疲れないし、ちょうど良い距離感の田舎。

以前、東郷町で同じお店をやっていた時に、小原出身の子がアルバイトに来ていて、もともと、山側に住みたいという思いがあり、その子に頼んで、小原で家を探してもらっていた。

ランチのサラダとコーヒーのセット

数年後、小原で物件が出たと連絡が入る。行ってみると一目惚れで即決。また近所の方もすごく良くしてくれて、とにかく気に入っているそうだ。

小原は人が良くて、小原に住んでいる人が店をやっていると聞いて『おばらでしょ』と店を訪ねてきて来てくれるのはホントに嬉しい。と山内さんは言う。

藤岡店は開店して2年。藤岡にお店をだしたのは東郷町からのお客さんも来れて自宅からも通いやすい立地だったから。料理はパンが中心で、ご自身で朝3時に起きて、パン、ケーキ、焼き菓子、スープ、サラダ、すべて手作りで仕込んでいる。なるべく余分なものは使わず、毎日食べても安心なものを提供している。ただし、食べた時の満足感も大事にしている。

コーヒーとスイーツ

最近は、姉が藤岡に引っ越してきてくれ、手伝ってくれるようになったので、積極的に各種お料理教室、様々なマルシェにも出店しようと思っている。小原では419市や小原マルシェにも参加予定だ。

朝9時から10時半までモーニング。11時半から14時までランチ。空いている穴場時間は平日14時。17時まで営業。お持ち帰りにスイーツやパン、焼き菓子。焼き菓子は詰め合わせもしている。子連れはもちろん、犬連れ（テラス席）もウエルカム。席から恵那山や猿投山が見え、「来ていただいた方に眺めのいい景色をみてゆーっくりボーッとしたり…実生活との間で、少しでもホッとできる時間になれたら」嬉しいそうだ。

定休日：水・木曜日
愛知県豊田市深見町木戸三六九―三三
電話0565（98）0491

M.M

小原いろいろ情報

【5月26日（土）】
豊田小原和紙工芸作家工房めぐり
小原和紙工芸作家の工房を見学。和紙のふるさと駐車場から無料バスに乗ってめぐります。
和紙のふるさと
電話0565(65)2151

【5月27日（日）】
小原歌舞伎五月公演
開演10時半～
毎年恒例の地歌舞伎、素人を超える演技は必見。子供歌舞伎も含め三幕を公演。
小原交流館「ザ・小原座」

【6月3日（日）】
小原マルシェ 踊ろ舞！おいでん小原合同開催
地元の食材はもとより、グルメ・ワークショップ・ライブありの楽しいマルシェ。おいでんまつりイベントで、小原の「マイタウンおいでん」。見応えのある有名踊り連も参加します。
会場小原交流館 第二駐車場
時間10～15時、
駐車場は和紙のふるさとをご利用ください。

おばら地区の物件を探すなら!
豊田市　空き家バンク　検索
www.city.toyota.aichi.jp/akiya/

小原の情報ページ　おばちゅう以外の人もOK!
『おばちゅう卒』是非登録してね!
www.facebook.com/obachuu

STAFF 小原白字感　編集後記

笑顔の為に自分らしく活動される方々にお会いでき、とても清々しい体験をさせて頂けて嬉しいです。Iターンで小原に引っ越し2回目の春。私には何ができるのかな～。ドライブと花見を楽しみにしつつ。

M.M（今号編集長）

スギ花粉と原稿に追いかけられる夢を見て寝不足。続けての編集委員で思ったのは、小原はすごい人材がいっぱいいること。点と点がつながれば、いろんな小原の時間が過ごせるのでは。取材先のみなさん、ありがとうございました。

K.A

土筆が頭をのぞかせ、桜もちらほら…ウグイスも鳴き始め小原にも春が訪れました。実は今日、小学校の卒業式に来賓として出席しました。この子達は、小原の未来を担ってくれるのかな?とおもいつつ門出を祝いました。

M.T

今回は、人物にスポットを当てて取材をしました。長年、取材してみるとわかりますが小原には本当に多彩な人が多い。でも一般的には知らないし、接点もない。おばらのじかんは、それをつなげる役割になってくれると嬉しい。

T.S

ようこそ おばら委員会
発行:2018年4月【ようこそおばら委員会事務局 豊田市役所 小原支所】
〒470-0592 愛知県豊田市小原町上平441-1 Tel 0565-65-2001 Fax 0565-65-3695
E-mail：obara-shisho@city.toyota.aichi.jp　今後、本誌の郵便を希望される方はご連絡ください。